慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	海運に関する米国の近刊書二種
Sub Title	
Author	増井, 幸雄
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.1 (1922. 1) ,p.141- 146
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220101-0142

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ぬ。

以上はギブソン氏の提案の梗概であつて其計表本位制度が一國貨幣制度上最も適當なることは既にアービング、フイッシャー其他の人々の說に依つて明白なる所であるが其必要條件として國際間の協力が無ければ何等の效果もないのであるから若し此協約さへ成立すれば最も適當なる貨幣本位を見出し得るわけである。然しながら猶問題となるは第一萬國銀行はよく政治的圈外に超越し得るか第二其利子政策と一國關稅政策と兩立し得るか否か第三萬國紙幣の流通は一國の貨幣制度を混亂せしめざるか第四爲替値段を以て法貨たるの價格とすれば流通上に多大の不便を感ぜざるか第五通貨膨張の爲めに爲替相場の動搖を來したるものとすれば猶之以上紙幣を發行し流通せしめ得るか又國家が其通貨を恢收する手段と如何に聯絡を保つか。第六今日の紙幣が兌換を基礎とする以上完全に兌換を行はずして割引政策を適用して其所期の目的を達し得るや否や等少〳〵共之等の問題を考察しなければならぬのであるがそれは私のよく論じ得べき點でない。（完）

新刊紹介

原口亮平解說

ほーきんす氏工場會計

定價　貳圓參拾錢
發行所　寶文館

ほーきんす氏のCost Accountsは氏自らが其緒言に於て述ぶるが如く「製造原價の確定に關する原則を一般的に說明し例を用ゐて此原則の運用を明らかにする」目的を以て著されたるものにして、其說明の方法は先づ「原價を構成する要素を考察定義して然る後に順次に各要素を論ず」るものなり、從つて「最初には原價計算簿に於ける其取扱方法を述べ然る後に一般の帳簿即ち會計帳簿に於ける其位置を說く」順序にして、部分々々に確められたる智識は斯くて漸次に全體の系統中に納めらるゝ仕組となり居るが故に簿記に就て普通の素養ある者には何人にも了解し易くして、然かも容易に之を實際に適用し得るの便ある良書なりと言ふも決して過ぎたりと謂ふ可からざるなり。而して之が解說の任に當られたる原口氏は極めて明晳なる文章を以て原著者の意を巧みに傳へられたるが如くなれば、評者は衷心より此書の出現を喜ぶと同時に之を吾等同好の士の左右に奬むるを辭せざらんと欲する者なり。（三邊金藏）

海運に關する米國の近刊書二種

米國は歐洲戰亂前には自國の海外貿易額の一割をも自國船で運送することが出來ない程に商船の少きことを嘆じて居つたが、戰亂中に俄かに船が殖えて今や一躍して世界の大商船國としての地位を得、往年 Clipper 型帆船の時代に於て有せし優越の地位を再び恢復せむとするの勢を示すやうになつた。斯く船が俄かに增加した結果として此の船を如何に運用すべきかは米國

にとつては一大問題である。殊に米國民は從來その注意を餘りに多く鐵道に注いで居つて海運に對しては餘り興味を持つて居なかつた。加ふるに此の俄かに增加した商船隊は平和時代の商戰の爲めにといふよりも寧ろ戰時の急に應ずる爲めに急造せられ從つて幾分不利なる條件を具へて居る。だから此の國民をして此の商船隊を有效に運用せしめむとするが爲めには頗る大なる努力を要する譯である。さればこそ休戰の前後に至つて俄かに國民の注意を海事に向ける爲めに種々の施設が行はれたのであつて政治家も一般國民も大分注意を海に注ぐことになつた。即ち海員養成の機關は各所に設定せられ、紐育大學の如きでも數年前海運に關する講座を特設して主として實際方面の知識を授けて居り、議會は昨年 Jones 海運法を通過するといふが如く、運用者と經營者とを養成し之に加ふるに國家的後援を以てするといふ有樣である。人心の狀態が既に斯の如くであるから海運に關する著書の刊行が盛んになるのも當然のことであつて數年來その著しきものあるを見る。今千九百二十年に公にせられたる海運書の中、次の二つを紹介する。

(1) G. G. Huebner, Ocean Steamship Traffic Management. Appleton & Co., N. Y. pp. 266. Price $3.00 Net.

本書は、對外商業及び海運奬勵の目的を以て三四年前に米國商務省內に設けられた「聯邦職業敎育局」(Federal Board for Vocational Education)がその目的に資する適當なる參考書を供給せむが爲めに、局長 Dr. E. R. Johnson（ペンシルヴェニア大學ホワートン・スクール（商科）の學長）と副局長 Dr. R. S. Mac Elwee（數年前に港灣設備論を公にしたる權威者）との編纂の下に、指導を受けざる個々の研究者の用に供する爲めに並に學校に於ける敎科書用に供する爲めに發行せらるゝことゝなつた叢書の第一冊である。而して著者はペンシルヴェニア大學に於て Dr. Johnson の下にあつて商業及び海陸交通に關する講義を行ひつゝある青年學者であり、著書に於ても事業に於ても最も多くの場合に於て Dr. Johnson と事を共にしつゝある一權威者である。今その概略を示すと、全卷二百六十六頁は三部に分たれ、第一部は「海運の運輸組織」に關するもので第一章に於ては船會社所有船の航海の種別や自家所有船の區別、海運關係の種々の營業、海運同盟の存在、政府の干涉等の見地からして海運業は如何なる事情の下に於て經營せられて居るかを概說し、第二章及び第三章に於ては定期航海を行ふ船會社の業務組織を、貨物と旅客、輸入貨物と輸出貨物等に分つて說明し、第四章に於ては傭船によつて航海を營む海運業者の業務組織、管理、並に之が補助機關たる船舶仲立人の職分、業務組織、收入等を說明して居る。然るに是等の定期不定期航海は共に何れも完全なる自由競爭の下に於て經營せられて居るのではなくして、何れの方面でも競爭の制限が行はれて居るから、第五章では所謂海運同盟を說いて居る。此の章は Johnson and Huebner: Principles of Ocean Transportation 第十九章の轉載であるが、同盟の種類、組織、運賃同盟の種類、合同計算その他加盟者間の並に非加盟者に對する競爭制限策、同盟に對する非難と利益等を詳說して居る。以上の諸章で說明せられたるが如き海運會社に對して、之を利用して運送業務を行ひ又は之に貨物を供給するの地位に在ること、恰も陸上に於ける通運會社の鐵道に對するが如き關係に在るものがある。對外通運業とも云ふべき Freight Forwarding と船荷仲立業とが即ち是れである。そこで第六章では是等の業務がその性質、組織、料金、同業者間の競爭者の諸點から說明せられて、それで第一部が終る。第二部は海運業に要する各種の書類の說明に宛てられてあつて、第七章乃至第十三章の七章を設け、海運業者の必要とする船體積荷に關する各種の書類、合衆國政府の要求する書類、その外に米國の輸出貿易に關して外國政府の要求する書類、對外通運會社の必要とする書類等を說明し、最後の二章に於ては傭船契約をば期間傭船、定航傭船に分ち、前者を民間の

傭船と合衆國政府を相手とする傭船とに分説し後者を Gross form と Net form とに分説して居る。第二部の内容は性質上書類の標本を必要とするので多數の標本を挿入して書上に於て實際界の知識を得るに便して居る。第三部は「海運賃率とその制禦」に關するもので、第十四、十五、十六の三章に於て船賃の等級別と賃率表とを説明し、海運賃率が民間に於ては如何にして定まるか、政府の運賃は如何にして制定せられるかを説き、その他、港と內地との間の運賃、船車連絡運賃、船客運賃等の成立を述べて居る。而して最後の第十七章に於ては海運賃率に對する合衆國政府の干渉をば四項に分つて詳述し、以て卷を終つて居る。

通覽するに、本書は表題によつても察せらるゝが如く、理論を説かないではないが寧ろ實際の説明の方が大部分を占めて居る。故に實際方面よりも寧ろ理論や技術を一層多く説いて居る所の Johnson & Huebner, Principles of Ocean Transportation と併せ讀むことによりて海運の全體を通覽することが出來やう。本書と右の書物との關係は恰かも Johnson and Van Metre, Principles of Railroad Transportation に對する Johnson & Huebner, Railroad Traffic and Rates. 2 vols. の如かものありと云ひ得べきか。結構は秩序的であり行文は平明である、右の「海運原論」を讀んだものは必ず本書を讀んで益する所があるであらうと信ずる。又本書に引續いて本叢書中にて刊せらるべき（その或るものは既に出版せられて居る）Riegel, Merchant Vessels; Mac Elwee and Taylor, Wharf Management and Stevedoring; S. S. Huebner, Marine Insurance; Canfield and Dalzell, Laws of the Sea. 等を又と併讀せば海運の實際に携はる者として備へべき知識の大略が得られることになるであらう。

（2）Robert Edward Annin: Ocean Shipping. Century & Co, New York, 8 vo. 427 pages.

著者は紐育大學の講師であつて、專ら自己の經驗に基づいて書いたものだと稱して居る。前記 Huebner の著書が海運業の外部から見て書いたものであるとすれば Annin の此の書は海運業の內部に入つて內部から見て書いたものと云へるであらう。文章の中には洒落や俗用語が時々出て來て嚴肅の感を幾分殺ぐ所があり、又全體として秩序的でないといふ感じも起るが、然し從來知られたる米國出版の海運書に稀に見るやうな實際上の知識が溢れて居る。全卷四百二十七頁を本文三部と附錄とに分ち、第一部は「船舶」と題しては居るが始めの六章は主として歐洲戰亂當時の事情に基づいて海運界なるものが實業界の中で如何なる地位に在るやを米國海運、運賃、船價、勞働問題、船員、其他の點から概説して居り、各種の術語を簡單に一箇所で説明して居る所の第七章から始めて海運論らしいものに入る。第八章では貨物船を概説し帆船の衰頽、燃料としての重油の特長を説き、第九第十の兩章に於ては貨物汽船特に不定期船に就て研究し不定期船經營に於て成功する爲めに注意すべき諸點を述べて居る。第十一章では燃料の研究、次の三章では波止場作業の研究が行はれて居る。第二部は「事務所」と題して居るが、初めの二章は外國貿易と外國爲替を説き、次の二章で會社の運輸課長が如何に機敏の處置と才幹とを必要とするかを各方面より述べ、之れに續く三個の章に於て一般船貨と題してその取扱方如何が收入に多大の相違を來すことを種々の方面から説き他の諸書では一寸窺知し難い事柄が書いてある。此の第二部では此の三個の章が花であらう。以下の諸章では海上保險と船荷證券と會計とが説かれてある。第三部は「傭船」の研究で傭船の仕方から傭船の種類、契約の條項等を十三章に細別し百二十餘頁に亘つて詳説して居る。本文は以上を以て終るが此の外に政府や民間の傭船、國有船の委托經營、海上保險等に關する各種の書類標本や規約や法規等の附錄が十四個許り載つて居つて頗る有用である。Huebner の書は實際がゝつた書物であると思つて讀んだが、此の書に至つては更に實際的なもので、人は之によつて机上の空論から餘程遠ざかり得ることと思ふ。その論ずる所は詳しくは

ないかも知れぬが廣くは亘つて居る「聯邦職業局」編纂の叢書五六冊の説く所は簡單ながら本書に於て窺はれ得やう。（増井幸雄）

小泉信三著「社會組織の經濟理論的批評」

四六版四〇三頁
定價金參圓
下出書店發行

本書は小泉教授が最近一年數箇月間の勞作中專門學術雜誌以外に於いて發表されたもの、大部分を採錄されたものである。故に教授最近の傾向を知ることが出來よう。收むるところ「人口原則と社會問題」「人性樂觀と社會組織」「小工業と無政府主義」「不勞取得と土地社會主義」「フエビヤン社會主義の功過」「正統派經濟學と社會主義」「ロオドベルトスの國家社會主義」「シヤアル・フリエエの社會的空想」「流行と資本主義」「社會的法的經濟學派」「失業問題概論」「サリヤム・モリスの無何有鄕消息」「功利主義的法律及び政治論」の十三篇の外、本誌々上に掲載された新著評論十一篇を加へてある。上述の諸論文はすべて經濟學者としての教授が社會問題、社會組織に關する諸學者の議論を批評若しくは紹介されたものである。從つて是等から純粹に教授の立場を掴むことは困難であるかも知れない。然し尙ほそれ等の論述の際に漏された著者の言葉から其の立場の一端を覗ひ知ることが出來るだらう。

社會組織改造の可能性を認むるものは、其の程度の差違こそあれ、すべて人生に對する樂觀説を採る者である。教授も亦此の意味に於いて樂觀説に左擔するものであらう。從つて自然法則としてのマルサス人口論に對して何等かの解釋を與へなければならないやうになる。「社會主義共產主義は、少くも下層階級の物質的負擔を輕減して、其生活に餘裕を生せしめん事を期するものであるが、若し人口原則が眞理であつて、生活上に生じたる餘裕は、必ず之を消滅せしめる程度迄、人口の增殖を促がさなければ已まぬものとすれば、一切の社會改造運動は畢竟地獄に於ける Sysiphus の努力である」（二頁）と云ふ問題が提起されるのは極めて當然である。是に對する教授の態度は決して所謂樂天論と等しくない。社會主義社會に於ける人口に就いてカウツキイを論評せられた教授は寧ろカウツキイに反して社會主義社會に於いても亦人口の增加を懲め、「斯る社會に於て、一度實現せられた幸福なる狀態を維持する爲め、人口增殖の人爲的制限を行ふ事は、恐らく已む事を得ざる必要事かと思ふ。勿論マルサスの唱へたものと、意味も方法も同一ではないが、『道德的制限』は社會改造論者の直ちに無用として廢棄すべからざるものと思はれるのである。」（四一頁）と結論されて居る。斯くの如き論斷に到達するものは人間の利己心を承認して、「その利己心の自由發動は、結果に於て社會公共の利益となるものと認め」て樂觀するものではなく、寧ろ自由放任を非とするものでなければならない。然し又他方教授はクロポトキンの如く人間性のよき一面を樂觀視するものでもない。「私は人間を事實以上に善きものと觀ると云つた。換言すれば彼れは人間を信じ過ぎて居る。」（七二頁）とクロポトキンを批評されて居る。蓋し教授の立場は中庸にある。ゾムバルトの「富瀦なる想像力と機警なる著眼」とを認められても、尙ほ概括に急なるを排斥さるゝ如く、（序）其の個々の心理學的研究に信を置かるゝも、總括的結論に俄かに同せられて居ないやうである。是は又一面教授の愼重なる態度を語るものであらう。「前代の人の築き上げた足場の上に、更に何物かを築かうとせずに、前人の事業とは沒交渉に、空に憑つて獨斷的に、當て物のやうに、何か新らしい事に思ひ着くのが所謂獨創であるならば、思想史上の偉大なる人物には、みな獨創的の評語を許す譯に行かぬ。獨創を尙ぶのは固より當然の事であるが、それが前人の業積に通曉する勞を怠る口實となつてはならないのである。」（一五三頁）の一節は明に教授の態度を示すものであり、一面輕